
こんなうまいもん たべたことねー！

シゲさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こななうまいもん たべたことねー！

【Nコード】

N8907B

【作者名】

シゲさん

【あらすじ】

バナナがとっても高価だった頃の話です。貧しかったけど、いつも心のどこかにある私の原風景です。

母ちゃんが手術した。

子宮何とかと言う病気だそうで、子供の僕には、よく解らない。
何でも、おなかの中におできが出来、それを取らなければならないらしい。

母ちゃんが居ないから、父ちゃんは大変だ！

その頃の僕の家には、水道もガスも無かったので、

朝早く家の近くを流れる小川で水を汲み、その水を使って

ご飯や味噌汁を作らなければならない。

僕と妹が起きてくると、いろりには、

温かいご飯と味噌汁ができていた。

父ちゃんは、

「母ちゃんが入院して大変だから、お前らしい子にしてなーあかんぞ」と

ご飯を食べながら、僕らに向かいよく言った。

それを聞くと僕は、心が痛んだ。

算数の足し算は出来ないし、

国語の本もうまく読めないし、

体育も、音楽も全然だめで、

いつも学校の先生にしかられている僕は、心が痛んだ。

その頃の僕は、

鼻水がいつもたれており、

授業中それが口元までたれてくるので、袖でふき取るのに忙しく、学生服の袖は、鼻水が乾き、まるで糊付けしたように、「ぱりん、ぱりん」になっている子供だった。

母ちゃんが入院してから、10日ごろたったある日、土方の仕事から帰ってきたとうちゃんが、急に「母ちゃんの所へ、連れて行ってやるから」といいだした。母ちゃんの入院している病院は、福井にあるらしい。家からかなり離れてて、電車に乗っていかねばならないらしい。私と妹は、母ちゃんに会えるのもうれしかったが、2、3回しか乗った事の無い電車に乗れるのもうれしかった。家でいっちょらしいの服に着替え、父ちゃんに連れられ駅に向かった。

電車に乗ると座席は、空いていた。僕は、窓の景色が珍しくあいた座席の間を飛び回っていた。「こら、おとなしく座ってえんか！」と父ちゃんは怒るが、怒られた当座だけおとなしくなるだけで、又座席の間を飛び回りはじめた。

しかし、福井に近づくにつれ電車はだんだん込み合ってきた。もう、電車の中を飛び回る事は出来ない。

そして、福井に近づくにつれ、電車に乗り込む人達の洋服も違ってきた。

男の人の洋服は、父ちゃんみたいな、仕事する時の服ではない。

又、女の人は、かちゃんがよくはいているモンペでなく、きれいなスカートをはいている。

僕の隣に座ってたスカートをはいた女の人からは、いいにおいがする。

「街の女の人は、母ちゃんと違い、いいにおいがするなー」と思いながらも、

見知らぬところに来ている事に気づき、不安になり、父ちゃんの隣で、小さくなっていた。

福井駅に着き、かあちゃんの病院に向かう。

ここは、自動車が多い、人が多い。

僕の住んでるところでは、馬車はよく通るが、自動車なんてめったに通らない。

道はでこぼこで、舗装なんてされてない。

「迷子になっては大変」と思い、

僕も妹も父ちゃんの手をしっかりとにぎる。

僕は、母ちゃんに会えるは、うれしいのだが、チヨット緊張もしていた。

それは、いつも怒られていたからである。

「鼻水を学校の服で拭いたらあかんやろ！同級生の芳男ちゃんは、

しつかりしてる！

それに比べお前は何じゃ！母ちゃんは、情けない」とか

「新ちゃんは、勉強できるらしいよ！それに比べ、お前は、通信簿2ばかりじゃないか！

母ちゃん、恥ずかしいやら、情けないやら」とか

ほめられた記憶なんてほとんど無く、

会えばまた怒られるのではないかと言う恐れからだ。

病室に入る、

母ちゃんは、僕と妹を見て

「よう来たなー！よう来たなー！いい子にしてたか？」と言い、嬉しそう。

そして、二人の頭を「ゴシゴシ」となでた。

今日の母ちゃんは、いつもと違い優しそうだ。

父ちゃんと母ちゃんは、子供の僕等には、わからない大人の話をし始めた。

そしてそれが一段落したのか、

母ちゃんが、僕と妹に向かい

「お見舞いでもらった果物があるから、皆で食べよう！バナナって言うんだ。

とても珍しいものだよ。母ちゃん、1本食べたけど、こんなうまいもの今まで食べたことねえ！

こんなうまいもの自分一人で食べたら、罰があたると思い取っておいたんだ」

と言いつつ、バナナを取り出しにかかる。

僕も妹も、初めて見るバナナ！
まるで野球のグローブだ、

「父ちゃんの分、お兄ちゃんの分、洋ちゃんの分、それに母ちゃんの分」と言いながら、1本、1本房からちぎり、それぞれを手渡す。
「皮むいてたべんだぞ！」とお母ちゃんが言えば、
「そんな事知ってる。俺が東京でいた頃、バナナを何本も食べてる」と父ちゃんは、怒ったように言う。

全員バナナの皮をむき始める。

僕は、バナナを一口パクリ。
「本当や、母ちゃんの言う通りや！本当にうまい！これなら、何本でも食べられる。こんなうまいもん、たべたことねー！」

父ちゃんも、バナナを一口パクリ。
何にも言わない。
でも、うまいに決まってる。

父ちゃんは、昔から無口なのだ。

母ちゃんも、バナナを一口パクリ。

「うまいのー。その上、味が上品だ。やっぱり高いバナナだけのことあるは！」

妹も、バナナを一口パクリ

「本当や、こんなうまいものくったことねー」

母ちゃんの手元に、まだ4本のバナナがある。

父ちゃんと僕と、妹に1本ずつバナナを手渡す。

僕は、今度はゆっくり食べようと思った。

早く飲み込んでしまうと、口の中からバナナの味が無くなってしま
うから、

ゆっくり、よく噛んで食べた。

そして最後の一口のバナナを飲み込んだとき、

「次にバナナが食べられるのは、いつになるのかなー」と思い、さ
びしかった。

母ちゃんの病院から家の帰る途中
歩いてる時も、電車に乗ってる時も、
うまかったバナナの味が忘れないように、
頭の中で思い出す。
母ちゃんの事より、バナナの事で一杯だ。

家に着くと、
父ちゃんが僕と妹の布団を敷いてくれ
「もう遅いから早く寝ろ！明日、寝坊すんじゃないぞ」と言う。
僕は、
「父ちゃん、今日のバナナうまかったなー！あんな うめえーもん
食えて本当に今日はよかった！
母ちゃん、早く治るといいなー。父ちゃん、お休み」と言い
布団にもぐり込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8907b/>

こんなうまいもん たべたことねー！

2010年12月21日18時48分発行